

第 18 回関西建築家大賞受賞者 木村吉成・松本尚子 氏

町家というものの背後には、個々の住戸を独立した単位とするのではなく、それを町というより大きなまとまり内の可変的な部分として捉える感覚がある。京都では、さらに踏み込んで、通りを挟んだ両側をひとつの町とする「両側町」制度が定着していったことに見られるように、そのまとまりを物理的に連続する一街区である以上に、通りをも含み込んだ抽象的な秩序として捉える伝統を持っている、とも言えるだろう。

対象作品として応募された2つの建築、House A_shop B と House S_salon A は、いずれもそうした京都の町中に建てられたものであり、京町家のありかたを踏襲しようとしている意欲的な建築である。特筆すべきなのは、その踏襲を、かつての京町家もっていた間取りなどに直接的に求めるのではなく、上に記したような、むしろその背後にあってそれを成立させてきた関係の体系＝構造にまで遡って踏襲することで、隣家との境界を融解させ、家あるいは家と都市の関係を問い直していることである。

しかもこの場合の「境界の融解」とは、一般的に視覚的に開かれている、という意味ではなく、関係の体系＝構造でありかつ物理的な構造としての抽象的な意味での開放であって、「そう見える」ということではなく「そう在る」ということに賭けられている。具体的に言うならば、House A_shop B ではトの字型の鉛直材を中央に並べ、いわばヤジロベエ型の架構とすることによって、House S_salon A では 120mm x 450mm の集成材の柱を中央に並べ、側壁側では鉛直荷重のみを負担させることによって、可能性としての隣家側への拡張が担保されている。物理的に、あるいは視覚的に拡張する・つながることなく、想像的な次元での連続が試みられているのである。

問題は、こうした試みはその段階で終わるのではなく、作り出されたその空間において、その住戸内の世界に棲まっているという感覚を超え、町全体にまで広がる抽象的な秩序のなかで生を営んでいるという感覚にまで達することに成功しているか、だろう。その点で、House S_salon A は、中央に立ち並ぶごつい柱の存在感と隣家側に（無造作に）開けられた窓によって、抽象的な構造が柱列という物理的な構造に相変移していることもあって、どこまでも続く柱群のなかに佇んでいると感覚を十分に与えるものである。一方、10年近く前にできあがった House A_shop B は、その後、隣接地も取得されたにもかかわらず、当初、想定されていた物理的な拡張という道にはあえて進まず、秩序の敷衍という道での拡張を計画していると聞く。

氏の設計には、現実の都市を前にして一貫して、論理と実践あるいは抽象と具象との間で振幅の大きいこうした往還が見られ、その運動そのものを設計行為とするという思想に裏付けられているだけでなく、その成果を着実にあげていることから、関西建築家大賞に相応しいと判断した。